

081 ポンポン山 030922

- ◎自転車で今城塚古墳のあたりを走っている。自宅から摂津峡下の口までほぼ1時間、なだらかな上り坂が続く、しんどい、エイコラ。ポンポン山は近所の低い山だが、神峰山寺まで自転車と摂津峡歩きのアルバイトがすごい、8:40に家を出て、帰り着いたのが6:40、ほとんど10時間動きっぱなし、年々きつくなってくる。
- ◎台風11号が太平洋を西の方に動いている。日本付近に高気圧があって、北に動けず西に動くらしい。西にゆっくり動いているあたりの海水が30度、水温が高いほど台風は勢力を増すらしい。今日あたり西から北に向け動くらしいが、勢力の大きな台風がやってくるのはぞっとする。今から登るポンポン山、あの時は初めて、「台風の風 こんなにきつい こんなにこわい」家が揺れ出しぞっとした思いで、ポンポン山の樹々もなぎ倒されていた。今回のようなでっかい台風がオレンチにやってきたら、家が倒れるもんね、クワバラである。
- ◎毎日ちょっとずつドシャ降雨が降っていた、地面はたっぷり水を吸っている。安威川の橋の上、泥色の水嵩が流れていた。横を流れる摂津峡の芥川も水嵩が増し勢いよく流れている、轟音を立てている。水のそばは涼しい、爽やかな風がシャツの中をすり抜ける。
- ◎お、水が出ている、上を見ると流れではない、地下水だ、いつも通るところだけれど気が付かなかった。濁ったように見えるけど冷たい、エイ、飲むか、なかなか美味しい。
- ◎11:15登山口にやって来た。夏の日差しがまだまだ暑い、原の村を抜け登山口にやって来た。「原村 資料展を見て」覗いてみた。古地図に出ている人家は15軒ぐらいかな、今よりずっと少ない人たちだったんだろうね。牛地藏の古い祠、寒天を作り人たち・・・10分ぐらいのつもりがもうちょっといたのかな。
- ◎たっぷり水に含んだ登山道、黄色がやたらと目立つ。水に削られ堆積岩のように板状に黄色が積み重なっている、石かな、なんて油断するとこれが粘土、下手に靴を乗せようもんなら、ツルリ、すってんころりンである。黄色がきれい、黄土色のところ、やや赤みの帯びたところ、やや黄みの帯びたところ、水に光ってそそられる。普段は灰色に近い黄土色だろうがドシャ降りに叩きつけられ柔らかいところが融け流れ、ささくれだった部分が光っているのかな、いたく気に入った。昔、水銀鉱山の話聞いたが、坑道の中全部が赤色という話、想像するだけでもその赤色の輝きに感動した。それに比べればたいした黄色でないが、きにいった。
- ◎12:40 本山寺の参道に合流、時間が押している、暑いのと、老化が進んだのと、いやあ体力が減ってきている、とろとろ歩きだ。そういえばちょっと前まで大股ですいすい歩いていたが、トボトボ感が増したかな。ここでおにぎりを一つ、バナナを一本喰った。途中でパンを喰った。
- ◎本山寺で水を1リッターいただいた。1.5リッター持ってきているが本山寺で水を汲もう思っていた。ずっと曇り気味だった天気、この時間になって陽が射しだし、暑い、半そでシャツが濡れている。
- ◎週日の今日も10人ぐらいの人と会った。いつもの登り道、後ろで音がするので振り返るとちょっと若い人、ここはめったに人と会わない道ですね、なんて言いながら追い抜いてもらった。上の山道では老いも若きも歩いていた。今日は雨続きのなかの晴れの日、どうかにわか雨も降らないで、という願いがききいれられ、家に帰って1時間ほどしてザザ降りの音を聞いただけだった。これを書いている翌日も陽が照っているが、やはり急な雷雨がありますよと言っている。
- ◎2:30 ポンポン山から下り始めた。てっぺんは晴れている、日差しがある、青空の中に雲がいっぱい、それでも、降りそうな雲はない。シオカラトンボが10匹ぐらい飛び回っている。シオカラトンボと言ってみたが、調べるとシオカラトンボは青みがかかったグレーのトンボらしい。飛んでいたのは黄色がかかったグレー、わからないが、赤とんぼは黄色から秋になると赤に変わるらしい。ま、トンボに会えた、でいいかな。淀川の流れが見える、大阪のビル群が見える、洛西の家々、向こうに京都市内、ここは京都府と大阪府の境だそうだ。
- ◎本山寺まで下りてきた、まだまだ先が長い、今日はばてたね、いやあもうちょいがんばらねば、摂津峡がある、自転車がある、暗くなる前の6時半ころには帰り着きたい。オレの自転車、ライトがつぶれている。
- ◎帰り道はほとんど下り坂、もうちょい、もうちょい、牛地藏で最後の休憩、ビスケットと水。5:40自転車で乗り出した。帰り着いたのは6:40。へとへと10時間行動でした。

三浦祐之著<神話篇>

◎古事記、また初めに戻って。

◎天地初発之時 於高天原成神名 天之御中主神 次高御産巢日神 次神産巢日神

此三柱神者 並独神成座而 隱身也

◎天：あめと 地：つちとが 初めて姿を見せた その時 高天が原に成り出た神は アメノミナカヌシ 次に タカミムスヒ 次に カムムスヒ この三柱の神は みな独り神と成りまして 身を隠された

◎天と地が出現し、その天は高天が原と呼ばれ、そこに神が出現する。ひとり神：性をもたないさま。

◎二番目の、タカミムスヒは、アマテラスの参謀のような形で、高天が原の政務を司り、出雲制圧（国譲り）の時には、アマテラスを凌いで意見をいう。神話が進むと、タカギと名を変え活躍する。

◎カムムスヒは、スサノオやオオナムジ（オオクニヌシ）らの手助けをする。

◎古事記はすべて漢字で表記されている。基本の構文は漢文体だが、引用された歌謡は音仮名（万葉仮名）、散文部分は音仮名を交えた変体漢文になっている。上記の訳、本居宣長の本を読んで、「ほう そう訳すのか・・・」と感心した。生涯をかけて古事記を現代文（当時の江戸時代の話だが）に訳した。本居宣長の訳よりは、三浦先生の訳がよくわかる、すんなり入ってくる。

◎成り出た神は。ここで“成る”という言葉は、柿がなると同様のナルである。造ったものはいつか失われていくが、成るものは次々なるのだ。「不断に成りゆく世界：丸山真男」

◎世界の創成神話には、ツクル・ウム・ナルの三つの語り方がある。その三つの現れ方は民族によって違うとしたうえで、日本神話では、「なる」である。

◎つぎに、国はできたてで、水に浮かんだ脂身のごとく、海月なして漂っている。その時に、葦の芽（かび）のごとくに萌えあがるものあり、その成りてた神の名は、ウマシアシカビヒコチという。つぎに、アメノトコタチ。この二柱の神もまた、独り神となりまして、身を隠された。

◎葦の芽が春になって泥の中から芽吹くように現れたもので、ウマシアシカビヒコチと名付けられた。

◎先生：ウマシアシカビヒコチ：葦の芽そのものようである。地上の最初の生命は、葦という草であった。旧約聖書では、神が泥で造った人形に息を吹き込んで最初の人を造ったとなっている。古事記では人間の誕生は語られないが、ウマシアシカビヒコチこそが、最初に生まれた人、あるいは人の元祖となる、人は「うつしき青草人」と呼ばれている。

◎イザナキが黄泉の国から逃げる時、桃の実を投げつけ追っ手を追い払う、その時桃の実にいった。

◎汝よ、われを助けたごとくに、葦原の中つ国に生きるところの、命ある青草人が、苦しみの瀬に落ちて患ひ悩む時、どうか助けてやってくれ。

◎神々が次々現れるうちに、しだいに明確な男性性・女性性をもった神が現れ、その二人が結婚して国を生み、神を産んでいったという、イザナキ・イザナミ神話に展開していく。

◎男女の交わりによって、「生む」神の前に現れた神々は、「ウム」デハナク、「ナル」ことによって現れた神と語られる。

- ◎今日の山は初めての山、「信楽で一番高い山」だそうだ。昨夜急に、「明日でも・・・」と三宅さんからお誘いを受け、夜の10時に慌てて地図を作り、ザックに荷を詰めた。この山をネットで調べると、巔のサイトには載ってなく、ヤママップに記載されていた。皆さん、国道422号線沿いの2か所から、それぞれ登っているようだが、国土地理院地図には片方の道がない、「なんで？」と思いながらも地図を作った。サイト記録では、往復で2時間3時間の数字が踊っている。これらはランの連中が走っての時間かもしれない、気をつけなくては・・・。特に最近では、地図に記載されたコースタイムの2割増しぐらいの時間がかかるようになって来ている。
- ◎国道422号線、ぽつり家のある所、「これかな・・・」陶芸家の前のスペースに車を止めさせてもらった
- ◎10:45歩き始めた、なるほど笹がよく茂った山だ。しばらく行くと重機で山をえぐり林道を作っている、あちらこちらに樹が倒れている。「立ち入り禁止」の看板、「なんじゃこれ・・・？」歩くとまた泥んこ林道、こんなことが4.5回続き、「猿石」という看板のところまでやって来た。「むむむ 道がない わからない」小屋一軒ぐらいの大きな石、それを2.3回まわれば見つけられたかもしれないが、泥と倒木であきらめ、直登した。
- ◎5月の油日岳の時はぞっとした、「ええい 登れるか 落ちたらヤバイ・・・」先が見えないぶん、四つんばいで這い上った。今日の山は油日岳に比べればまだ二足歩行ができる、樹の幹を、根っこを、石をつかみ少しずつ進んだ。こういう時は、斜面のトラバースは怖いね、斜めに歩き、こけたら横向きに谷底に転落する。こういう時は、尾根道をまっすぐ登るに限るね、斜め横の上に空が見えてくる、「それいけ やれいけ てっぺんは近いぞ」結局400メートルぐらいの高低差を道なき尾根道をよじ登ったことになる。「この歳 こいて こういう無茶は 卒業しなくては・・・」反省するよりは楽しんでいる、あかんぞ。
- ◎地図と磁石は持っている、「多分 このあたり かな」自分の今の位置がわからない。三宅さんの高度計では、500Mだという、「500Mだと 地図では このあたりかな・・・」スマホには車の駐車位置と、現在地と、町の境界線が出る、これらを総合して、「むむむ このあたりまで来ているよ」
- ◎「その高度計 大丈夫？ 気圧で測る物？」「気圧で測る古いものだけど 今朝あわせたから・・・」「それなら信頼できるね」オレも通話のできないスマホ、山の地図専用を持っているが、時間がなく昨夜設定ができなかった。「今の現在地」これがわかれば、登山道はどっち、小屋はどっち、「こっちだよ」ということになる。
- ◎1時に乗越に出た、「おお 道があるじゃないの」5分で頂上に着いた。タヌキのでっかい置物があるが、てっぺんはただの道の途中という感じの場所である。2時間、道なき道をよじ登ってきた。昨日は、晴れの予報だったが降ってきた、しとしと雨、上の方はやや涼しい、これ以上強く降らないでくれ。
- ◎「雨乞石」まで行ってみようと歩き出した。この山は小屋一軒ぐらいの大きさの石が、歩いてきた道すがらでも、20.30個は見たかな。石はみんな花崗岩のようである。笹が多い山なので、笹ヶ岳なのか、そう思いながらも、思い返すと昔の山々は笹だらけだったのでは、どこの山に行っても笹が生い茂っていたような気がする。なんでこの山だけこんなに笹が多いのか、地面が見えない、雨に濡れた笹の葉っぱで服が濡れる。どなたかが、「シカが 笹を 食べるから 最近の山は 下草がない」と言っていたけど、ここも多くの鹿が居そうな気がするが、喰われていないね。
- ◎2時ころに雨乞石にやって来た。遅い飯にした。冷や飯に野菜を混ぜチャーハン気分、卵も入れた。ハッカの飴をもらったがこれが旨い。ここの石は丸く伏せた形、先に行くと滑りそう、その下は崖かな クワバラと言いながら端の方には近寄らなかった。写真で見るともっと大きい石を想像していたが、小屋の屋根程度の大きさだった。景色がすごいと書いてあったが、今日は霧のかかった曇り空、くっきり日は北陸の白山まで見えるそうだ。
- ◎下りは、「猿石」のあたりを確認しようと登山道を歩いた。道なき道も斜度はきつかったが、登山道もなかなかきつい斜度である。ロープが張ってあるが、雨で濡れた泥道は滑りやすく気が抜けない。渡渉があると書いてあったが、谷筋を渡るところがあった。「猿石」あたり、大きな杉があっちゃこっちゃんに倒れ、「おお なんだ これが道だ これはわからんわ・・・」の顛末である。往復5時間の山でした。

三浦祐之著<神話篇>

- ◎オノゴロ島：ここに、すべての天つ神の、もろもろの神々のお言葉で、イザナキ、イザナミの二人に向かって、「この漂っている地（くに）を、修め まとめ 固め なされ」と仰せられ、アメノヌボコをお授けになり、ことを委ねられた。
- そこで二人は、天の浮橋に立ち、そのヌボコをずっと下に向けて指しおろして、その漂う海と泥との混じる塩を、コロコロと掻き回し掻き鳴らして引き上げなされる、その時に、ヌビコの先からしたたり落ちた塩が、重なりつもりに積もって島になった。
- ◎イザナキ、イザナミは、そのオノゴロ島に降り（天降り：あまもり）、それからハイライトの、「お前の身体は いかにできているのか・・・」なんてことが始まる。
- ◎マグハイは何度か失敗のあとに、アハチノホノサワケ（淡路島）、イヨノフタナ（四国全部をさす）の島が生まれた。この島は、身体はひとつでありながら面（おも）が四つもある。伊予、讃岐、粟の国、土佐・・・次にオキノミツゴ（隠岐の島）、次にツクシ（九州全部）、身体はひとつでありながら面（おも）が四つもある。筑紫の国、豊の国、肥の国、熊襲の国。次にイキの島をお産みになった。次にツの島。次にサド。次にオホヤマトヨアキヅの島。これら八つの島、これら、オホヤシマをはじめお生みになったことで、ここを、オオヤシマノクニというのだ。
- ◎オノゴロ島とは淡路島のそばにある、“沼島”・・・か？先生は無言なり。八つの島は、淡路島、四国、隠岐、九州、壱岐、対馬、佐渡、本州。その後六つの島を生んだ。キビノコ、アズキ（小豆島）、オホ、メ、チカ（五島）、フタゴ。これらの島で抜けているのは北海道、東北の奥、伊豆の島々、奄美、沖縄・・・。
- ◎そのあと、イザナキ、イザナミの二人は次々と神を生む。古事記には神の名が列挙されている。その名前は長いカナ文字なので慣れるまで読みづらく割愛して、その役目は・・・、海の神、水戸（みなと）の神、岩や土や風の神、木の神、山の神、野の神、鳥のごとく空駆ける舟の神、火の神、糞から、ユマリ（小便）から成り出た神、等々40神。
- ◎燃え盛る火の神を生んだイザナキは、秀処（ほと）を焼かれてしまって、病に伏せてしまった。病のあとの神は、排泄物から生まれている。亡くなったイザナミを、出雲と伯耆の境、比婆の山に葬った。
- ◎残されたイザナキは、腰に佩いた十拳（とつか）の剣で、その子カグツチ（火の神）の首をはねてしまった。すると刀の先に付いた血が岩々に飛び、それぞれ八柱の神々が生まれた。またカグツチの亡骸から、それぞれ八柱の神々が生まれた。
- ◎ウジ虫：イザナミの体には、なんと、ウジ虫が数えきれないほど這いまわっておって、ゴロゴロという音が聞こえるほど・・・。古事記では、イカツチ（雷）と表現している。ウジ虫がゴロゴロ這いまわる死体は、当時もそれ以降も、街中にあったのでは・・・。オレも子ども時代、未舗装道路上で一匹のサバ、そのサバに無数の白いウジ虫を見て感動した覚えがある。ネットで、「未来のタンパク源」という記事も見た。
- ◎火：あらゆる文化は火をもつことから始まった。イザナミはホトを焼かれ、病に伏せ、亡くなってしまう。火という恐ろしい力を得るための大きな犠牲。カナヤマ（金山）ハニ（植・土：陶器）の神々が生まれる。火の魔力と魅力が象徴的に示されている。
- ◎若いころの山の中には焚火の跡がいくつもあった。山で働くおっさん連が、仕事を終へ、「一杯やろう」と火を点け、持参の一升瓶を傾け、歌い踊った跡かな。その昔、山の民が疇を持っていたのか、日々移動していたのかわからないが、山の夜の寒さ対策、料理に、火は魅力的なもんだった。歌え、踊れ・・・いいねえ。

三浦祐之著<口語訳：古事記>

◎イザナキは、神避（かむさ）ってしもうた妹イザナミ・・・。イザナキとイザナミは兄と妹の関係。兄妹の結婚はいかなる社会でもタブーである。ただ古代社会では、異母兄妹の結婚は、聖婚、理想婚ともされた。世界的にも、最初の創成の時、世の初めの時は、兄妹の結婚が語られている。

◎異母兄妹の結婚が理想婚とは、けったいな王朝だ。イザナキとイザナミは兄と妹が結ばれて、国や神を次々生んでいく。イザナミが死んでからも、神々を生んでいく、という不思議、ま、これは、神話なんだ。

◎黄泉の国：古事記では、神々の住む“高天が原”。人々の生活する“葦原の中つ国”。死者の住む“黄泉の国”の三つ、天・地上・地下という垂直的な世界観を持っていた。

◎オレ：アラーの神も、キリストも、わからない。わからないというより一神を、ひたすら信じている人さえまわりにはいない。オレにとって、勝手なものだが、八百万の神は天にいる。死ねば、焼かれはするが地下に潜る、地下に潜って土になっていく。生きている70年80年は土の上で這いずり回っていたね、なんていうがそれは違う、それこそ嘘をつけ、好きなように生きてきたのでは、と言われそうだが・・・。これが、日本人の平均的な思考なんか、みなさんはもっと違った感覚をお持ちなのか、友人たちとこういう死生観の話はしないねえ。神は信じなくても、生き方、処し方に、自身の方向を決め歩んでいる人がいる、これには頭が下がると思っていたが、これこれ、ジジイ、ババアになっていいかげんに笑って過ごせよ、といたいね。

◎アマテラスやスサノオの三兄弟はイザナキとイザナミの子だと思っていたが、オレの早とちりであった。

◎死んでしまった妹イザナミを迎えに言ったイザナキは、「愛しの妹よ 帰ろうよ まだし残した用があるので・・・」「それじゃ 覗かないで ちょっとまって・・・」覗くなど言われたら覗いてしまう人の性、そっと覗くと、なんと、イザナミの体全身にゴロゴロ音がするほどに蛆の蠢きを見てしまう。「うへへ こらあ アカン」慌てて逃げる。「見たな 恥をかかせた 逃がさんぞ」「逃げろ それにげろ」

◎這う這うの体で逃げ切ったイザナキは、「われは なんとも ひどく汚れた 穢がらわしい国へ行ってしまったことよ それゆえに この身の 禊をせねばならぬ」黄泉の国と地上の境、黄泉つ平坂は今の出雲の国、禊をしたのは筑紫の日向（ひむか）だという。神さんは新幹線並みに長距離を移動する、飛んでいく。この禊の時にたくさんの神様が成り出てくる。イザナミとのマグアイなしに成り出てくる、これは不思議な現象ながら、ま、神話なんだから・・・。次に水の流れに入って身を清めながら、またまた次々に神様が成り出る。禊の果てに、イザナキが左の御目を洗いたもうた時成り出た神の名は、アマテラス。つぎに、御右の目を洗いたもうた時成り出た神の名は、ツクヨミ。つぎに、御鼻を洗いたもうた時成り出た神の名は、タケハヤスサノオじゃった。最後の最後に、アマテラスとスサノウが現れた。

◎原の禊で、十あまり二柱の神々が成り出た。次に瀬の流れ、水の中の禊で、十あまり四柱の神々が成り出た。マグハイ無しに、26人の神々を生み成した。

◎タケハヤスサノオ：タケ・ハヤ：猛々しさや威力のある：国家の最高神アマテラスに対抗する荒々しい神として表現されている。

◎ここからは、口語訳の付録、先生が読者のキンタマを掴むが如くに上手く締めくくる、そして、高天が原の話につなげていく。

◎それにしても、イザナキは男の神じゃで、一人で子を生むことはできぬはずじゃが、黄泉の国に行き、そこから戻って生む力を身につけたのかのお。おのれ独りの力で次々に神を生み成していったのじゃ。

さてつぎには、イザナキの禊の果てにお生まれになった貴い三柱の神の伝えを語って聞かせようかのう。

- ◎10時：どこにいかうかと迷った末、“駒が池”に行こうと登っている。A・M・M・Oの常連4人、75歳のジジババ登山、きつい山は勘弁してくれとの要望に、あそこなら行けるだろうと計画した。
- ◎車で、木地村に向かって走る途中に、右折するところがあると思いながらも通り過ぎ、池原口に来て引き返した。ろくろ橋や、木地村バス停や、池原口からは、衣川さんと何度も登ったことがある。最近山ヒルが増え、「ヒルはいやだ」と登らなくなった。今日は横谷峠から、駒ヶ岳までの往復山行予定である。
- ◎草で地面が見えないところ、水がちょろちょろ流れ、ずるりと滑りそうなところ、まずそこから登り始めた。高低差の少ない簡単な山とは言いながら、最初から急な斜面が続く。エンヤコラシヨ、のぼれ登れ、高度を稼いでいく。峠がすでに444M、木地村あたりと比べ150Mのとくである。江若国境尾根の693Mまでの250Mは、ひたすらの登り、エンヤコラシヨ。何年か前、池で一泊と荷を担いで登ったが、すぐに着いたと思っていた、ということはこの何年かで体力が相当減っているということだねえ。
- ◎ここ、江若尾根の山、700、800Mぐらいの低い尾根、気候は嶺北地方の気候だと言われている、涼しい、風がある、雨雪が多いということからブナの樹々、樹齢200、300年ぐらいの堂々としたものも含め山々に君臨している。オレはこれが好きなんだ、でっかいブナの樹が枝を伸ばし葉を茂らせ空に浮いている。もう少し季節が経つと、落葉が始まり空がまる見えになる、これもまたいい、いいことづくめなんですよ。
- ◎9月に入って次々台風が来ている。近畿への直撃はないけれど生暖かい風が吹き、いつ天気が崩れるかわからない。11時の今、曇り空がやや明るくなってきたかな。江若尾根は嶺北地方の予報を参考にすればいいと聞く。嶺北とは曖昧な言葉らしい、一般には山や峠の北側の地方を指すらしいが、これまた一般的に福井県の北部、越前地方のことを言うらしい。樹々の緑がいい、下草はほとんどない、お気に入りのところだ。
- ◎黙々と歩いている、地面を見て、木の幹を見て、空の青と葉っぱの緑を感じている。雨が降ったのか地面は濡れている、汗が出てシャツもズボンも濡れてきたが、ふわりと感じる風は涼しい。今の台風は沖縄地方を通過しているぐらいなのか、風よりも雨の多い台風らしい。これを書いている翌日の今、天気図を見ると次の台風が3.4日後に、日本列島を縦断するやもと出ている。暑い、真夏並みの暑さ、アトリエも35度を超えている。
- ◎もうすぐだろう、あれれまだか、今度こそもうすぐだろう、こんなことが2.3度あってやっと右下に池が見えた。もうすぐだと連発するようになった、ジジイになった、笑っちゃうね・・・。「おおお 池に着いたよ」駒が池と小さい看板があるが、だれが名付けたのか正式名称じゃないが、ただ、「いけ」と呼ぶより、「こまがいけ」と呼ぶ方が様になるのでオレもこれからこう呼ぼうと決めた。決めたというけどすぐに忘れるかな。ここで車座になって飯を喰った。茄子の煮物、芋サラダ、梨、美味しいものがいっぱい出てくる。池の中ほどの草が黄色の混ざった緑、硫黄が萌えるように騒いでいる、いやあ、きれいだ、とまた言ってしまった。
- ◎駒ヶ岳まで足を延ばそうと歩き出した。えやこら、まだか、こらしよ、三叉路が現れ、すぐにてっぺんに到着。白い石が点在する小さいてっぺん、少し休んで、2時過ぎに帰途についた。
- ◎歩いていると、樹の幹のホゲたところに、ガマがいるという。見ると中ぐらいの若々しいガマがじっとしている。ここから賑やかにガマの油売りの話になった。羽織袴の香具師のおっさんが、袖をまくって腕を出し、刀の鞘を払って腕に当てる。「あいつら 刀に赤い絵の具をつけ それで腕をこすると 血が噴き出たように見える」「さあ 皆さん見て御座れ 血の噴き出たところに ガマの油を ちと 塗れば たちまち傷が消える」「四六のガマが 鏡に映ったおのれの姿 その醜さに たら〜り たら〜り・・・」Mさんの話は止まらない、抱腹絶倒である。オレも幼児のころに鳥飼村の鎮守の森で見たような記憶がある。
- ◎帰り道は、登りが2.3箇所、あとは下るばかりだ。ろくろ橋の分岐、池原口の分岐、最後の登りをのぼりきった地点693Mで、江若尾根から分かれ、横谷峠にぐんぐん下る。ちょっと霧が出てきた。またまたMさん、「お菓子の家 小人や 精霊が 現れそう・・・」「おおお 林道が下に見える 車が見える もうすぐだ」5時ころに到着、7時過ぎに家に帰り着いた。

三浦祐之著<口語訳：古事記>

- ◎禊の果て、三柱の貴い神を生み成したイザナキは、いたく喜んで、「われは 子を生み生みて 生みの果てに 三柱の貴い子を得たことよ」というて、すぐさま、項に掛けた首飾りをはずし、その玉を貫いた緒をゆらゆらと取りゆらかしながら、アマテラスに向こうて、「そなたは 神々の座(い)ます高天の原を治めたまへ」と仰せになり、すべてのことを委ねて首飾りを授けられたのじゃ。その首飾りの名をミクラタナというておるの。
- ◎イザナキはアマテラスにだけ、自分が身につけていた首飾りを与えるのだが、これはアマテラスが、天皇家の祖先神になっていくからである。アマテラスは女の神、今の天皇家は父系的な性格が強い。8世紀以前は女性天皇も多い、父系と言い出したのは8世紀以降なのかも・・・。
- ◎ 王政：現在の世界の王政国家は：検索してみると29か国が王政を取っているらしい。王政と一言でいうが、絶対君主とでもいうか、「朕が国家なり」という国もいくつかある。象徴であるという国、象徴とは言うがなかなか国民から慕われている王やら、国民からそっぽを向かれている王もいるのでは・・・。王政ではないが、北朝鮮のように、親子三代目が絶対君主的に振る舞う国もある。世界は様々で、国民が王家を断絶させた、廃嫡した国家も多い。古代や中世の国家はほとんどが王政だったのかな。
- ◎ 先日イギリスのエリザベス女王が急死した。96歳の高齢でいまだに公式行事をこなしていた、TVで時々その姿が流れていたが、さすがの96歳、大往生だったらしい。世界で一番有名な王だったかな、連日、訃報、葬儀準備、棺にお別れの行列(10時間20時間並んで待った人々がいたという驚き)、国葬・・・と報道された。われながら自身のことで驚いているが、「こういう行事もいいなあ・・・」という感想を言うようになった。
- ◎さてここから、アマテラスとスサノオの話。ウケヒ：これは初めて読んだとき、チンプンカンプンだったが、よくよく見聞きすると、呪い？占い？神がかり？そのような類のものかなと思った。ところがこのウケヒ、騙しのテクニックなんて簡単に言っただけ失礼なように、宇氣比神社も存在する、ウケヒに関する論文もある。今井先生：ウケヒは従来、人間の側が神に対して神意をうかがったり、祈願したり、また神に誓約する呪的宗教的儀礼として捉えられてきた。
- ◎スサノオがどこどこかやって来たことに、アマテラスは自分の高天が原を乗っ取りに来たかと訝る。それに対して、「そんな汚いことをしますかいな わたしの心が清らかであることを ウケヒで証明しましょう・・・」
- ◎アマテラスとスサノオは、天の安の河を間に挟んでウケヒをすることになった。
- ◎アマテラスが、まず、タケハヤスサノオの十拳(とつか)の剣を乞い取っての、それを三つに打ち折り、玉の音も軽やかに、ゆらゆらと天の真名井：泉に振りすすいでの、それを口の中に入れたかと思うと、バリバリ噛みに噛んでの、伊吹のごとくに吹き出した狭霧(さぎり)とともに成り出た神の名は、・・・この三柱の女の神が吹き成されたのじゃ。
- ◎続いてスサノオは、アマテラスが左のみずらに巻いてござった、八尺(やさか)の勾玉の、五百箇(いほつ)ものみすまるの玉を乞い取っての、玉の音も軽やかに、ゆらゆらと天の真名井に振りすすいでの、それを口の中に入れたかと思うと、バリバリ噛みに噛んでの、伊吹のごとくに吹き出した狭霧(さぎり)とともに成り出た神の名は、・・・そうしてスサノオの口からは、あわせて五柱の男の神が吹き成されたのじゃ。
- ◎アマテラスはスサノウに向かって、五柱の男の神は、我がものより成れり。それゆえに、我が子なり。また先に生まれた、三柱の女の神は、そなたのものより成れり。それゆえに、そなたの子なり。
- ◎スサノオはアマテラスに向かって、「わが心は 清く明し それゆえに わたしは手弱女(たわやめ)を生み成すことができた これによりて申せば わたしは おのずからにウケヒに勝ったのです」
- ◎なんでそれが 「勝ち」なんだ・・・？ほほほとオレ

- ◎今日は北小松方面からソロ山行を予定していたが、前夜に、「山上ヶ岳にいこう」と誘われた。ここは何年ぶりかな、大嶺奥駆道を歩いて以来か、その前後に来たか記憶が曖昧だ。奈良の六条で待ち合わせと聞き、どこだろうと調べると、薬師寺の近所だった。そこで8時に、吉中・三宅両さんと合流、75歳凸凹ジジイの山行。
- ◎北小松は、7:45 茨木発、北小松9時着。去年までは12時過ぎに釈迦が岳で弁当を喰っていた。さて何時間でどこまで行けるか試してみようという計画だった。
- ◎洞川から女人結界門の駐車場までやって来た。「駐車料金を1000円払わねば・・・」この駐車場、今まで10回ぐらい使っているが、人もいかなかったし、そんなことは知らなかった。女人結界門とは厳かな響き、いま時そんなと思われるが、今でも女人禁制だ。もっとも聞くところでは、破戒女性が何人かいたという。
- ◎修験道の山、墓スタイルの石の柱がによきによき、ところどころにある祠には、卒塔婆に梵字の文字、役行者：小角<おづぬ>の像が鎮座している。駐車場がすでに1000M 足らずある。1時間歩いても桧の樹林帯が鬱蒼と続く。まったくど忘れしていたが、これを書きながら地図を見て、大嶺奥駆道は洞辻茶屋からだったのかとあらためて驚き、そういえば、大嶺奥駆道を歩いていた時に、おお見知った処に出てきた、という記憶が蘇った。
- ◎先程“お助け水”がパイプから流れていた。柄杓で掬って飲んだが冷たくて美味い。上を見ると流れはないので湧水と思われるが、いったん石の手水にためパイプから出てくる、手水の中にゴミがあったのは興ざめた。9月下旬の今、葉っぱの隙間から見える空は青空が広がり、陽の光がキラキラする。シャツ2枚で丁度の気候。
- ◎12時になったので、「ここらあたりで弁当はいかが」という声に3人で流れのそばまで下りた。朝5時過ぎに起きたので、いつもの玄米ごはん、卵とじの野菜炒め、サンドイッチを二つ持ってきた。「ちょっとスケッチさせてくれ」初めて会ったYさん、絵の具を出して描きだした、そんなオレもとスケッチブックを出した。Y・M両さんは、デザイン関係の仕事で古くからの友人らしい。オレと違い金の稼げる仕事をされている。Yさんのスケッチも、ほんわか山の中で水が流れ、弁当を喰っている人を描いている。
- ◎さあ出発、エンヤコラどっこいしょ、のぼれ登れた。前半は階段と鉄に網を貼った橋がいくつもあった。
- ◎休日のこともあって、10人ほどの人と会った。我々は遅い出発なので帰ってくる人たちとの出会いがほとんどだったが、ザックを担いだ一人ずつ2人と会った。夕方近い時間なので、山上ヶ岳の先“小笹の宿”で宿泊かな。
- ◎お茶屋があるが閉じられている。上の宿坊も人影はない。記憶では茶店ではうどんやコーヒーが、宿坊には人がたくさんいたように思うが、まったく閉じられているのはコロナ禍のせいかな。
- ◎てっぺんに近づくとつれ、岩場が多くなってきた。1500Mを超えてもまだまだ樹林帯、針葉樹の植林帯が終わり、天然の針葉樹、でっかいヒノキにモミ、スギもブナもある、紅葉樹林帯、深い緑がまわりにいっぱい、山々が続く、どんどん緑の奥行だ。
- ◎鐘掛岩という名の絶壁がある、行ってみようという。怖いところはいやなオレだが、パイプに掴まり、鎖に掴まり、「おお 崖の上だ こわい こわい」話す気も、笑う気も、景色を楽しむ気もなく、早々に引き上げた。このあたりは岩稜地帯、歩きにくいなと嫌な場所だ。「虫に喰われた 痛い いたた この痛さは・・・」痛がっているのを横目に鎖を掴んで、足を下の岩に、次の足を次の岩に、ああ、土の上に降り立った、ほほほ。
- ◎てっぺんにやって来た。3時には下ろうと言っていたが、ちょっと上の台地がいたくいい、15分見て帰ろうと登った。この山で唯一の木のないところ、膝ぐらいのそよそよ草が茂り、白く枯れた幹、ヒョロヒョロの樹がまばらにある。大嶺奥駆道の時はこのあたりを通ったのは午前中だった、宿坊の僧に水をもらい4リットルをザックに詰め、急いで抜けていった。この時間に大きなザックを背負った二人は、まだ50歳代かな。
- ◎さあ急いで帰ろう、5時半には車に着きたい、6時には日が暮れる。今調べるとコースタイムは2時間になっている。「親に孝行するか・・・」とぶら下げられる岩などを見ていたので、3:30に出発して5:30に駐車場に着いた。75歳のジジ連としては息せき切って急いだ。山で無理はいけませんぞ、事故につながりますぞ。
- ◎朝6:30に出て、奈良に8時。登山口に10:30に着き、11時出発、3時に頂上、家に帰り着いたのは9:30だった。タイアードである、荷を片付け、風呂、ウイスキー、ちょっと食べ、寝た。

- ◎昼飯を喰って安威川にやって来た。「しまった レコーダーを 忘れてきた」 昨日から、「明日こそ 録音するぞ」と思っていたのにと拳で空をはたいた。拳で空をはたくなんてアクションは何年ぶりかな、よほど気持ちの上でしまったことをしてしまったと思ったんだろうね。
- ◎一昨日、「保健のことで・・・」と女の人が訪ねてきた。「誰を呼びましょうか」「隆久さん・・・」えええ、オレが何をした、なんでた、と思ひながら話を聞くと、「市の検診のことで・・・」2階に上がってもらった。「健診結果から自分の体を知る」という資料を渡された。「あなたは 今 ことです 血管障害の開始」という部分に印がつけられ、オレの検診結果の数字が印字されている。脂質と血圧の低い部分の数字に赤印が付いている。これが進むと、「臓器障害の発生」次に、「健康障害の発生」に進むという。前日登った“山上ヶ岳”のザックや靴が床に散らばっている、「運動は 充分やっていますが」
- ◎去年の暮れから、山に登っていて、「あれれ しんどい」と思うことが何度かあった。「酒かな 前日に運動したからかな」そんなこんなを訝りながらも、「いよいよオレも 山に登れなく なるんかな」とおぼろげに感じていた。75センチを誇っていたウエストが80センチになっている。「よし 痩せよう 65キロまで」と決心した。夏は毎年72キロぐらいになる、これは水をよく飲むせいだと思っていた。涼しくなってきた今、まず朝食を半分に、食間のサンドイッチもやめる。まだたった二日だが、まず2キロ減った、身体が軽い、「よしこれならいけるぞ 喰いすぎはよくない」なんて思いながら河川敷を走っている。
- ◎一週間前ぐらいから、「赤い おお 曼殊沙華」草ぼうぼうの中、ところどころに10本20本とによきによき表れ、赤を見せつけている。天然自然の曼殊沙華は造花のように整っていない、赤の中に、ボケた色、枯れた色が混じっているが、遠くのそれらはぼつりぼつりの赤、緑の中に赤リボンがささやいている。「ヒガンバナ」ともいう、おおそうだ、漢字じゃ雰囲気がでないねえ。もうひとつネットに埼玉県の高麗川が出ている。「おおヒゲさんに連れられ 行ったところだ」ヒガンバナの群生地らしい。ここは古く朝鮮の高句麗からの移民の群落だった、と聞いた覚えがある。この移民は、いつの時代なんだろうかね。
- ◎川の流れの方を見やると、向こう岸にサギが二羽並んで上流を向いて立っている。おお可愛いな、とよく見ると白い奴とグレーの奴だ。別種のサギなのに意気投合しているのか、不思議な光景。思い出すのは先日琵琶湖の湖西を車で走っていた、前の信号が赤なので、ゆっくり小さい橋を渡りながら左を見ると、白いサギが川の両サイドに等間隔で並んでいる。おお、「素晴らしい 何をしてる そらあ 餌を狙っている」50羽ぐらいいたかな、サギめ、あんな景色も見せてくれるのだ。先日、鳥の川上先生の本で、「白は よく目立つ 捕食者にも狙われやすい なのに白を選ぶのか」「仲間からもよく目立つ 団体行動には 白はいい」なるほど。
- ◎わがアトリエで油絵を描いている方が、100号80号の木枠を探している。オレもいくつか持っていたはずと昔のことを振り返った。20歳代の最初の個展、白鳳梅田画廊をお借りした。その時、100号の絵を10枚出品した。それ以来何枚か描いていたので、奥の倉庫に何本か在庫だろうなと思っていた。先日、奈良のYさんが山に行く車中で、「100号の木枠がある 捨てるのはもったいないので 要らないか」という。「欲しい 買います」「いや お金はいい・・・」というやり取りがあった。オレも、奥の倉庫を探してみた。探すと、簡単に言うが屋根裏部屋に、何やかやが詰め込んである。夏ならサウナ状態だが、今の季節の朝晩なら、と潜ってみた。80やら100やらがいくつか出てきた。もっとあるはずだが、奥の奥、体力がいるね。
- ◎Yさんにいただくなら、お礼はなんとしよう、とキャンバス値段を調べてびっくり、「えええ こんなに高いのか オレなら買えないね・・・」100号の木枠が2万円を超えている。100号の張りキャンも3万円近くする。画材は高いもんだと思っていたが、こんなに高いのかとシュンとする。
- ◎キャンバスとは、材木で造った窓枠のようなもの、そこに下地を塗った白い布を太鼓のように張っていく。15.16世紀ごろのヨーロッパでは、壁やら、木の板の上に描いていた。キャンバスが発明されて、持ち運びのできる画面ができた。えかきは、画材屋でぐるぐる巻いたキャンバス布と、木枠を買い、キャンバスを作っていく。張りキャンとは、安物の木枠に、安物のキャンバス布を貼った、安物キャンバスだ・・・失礼。

